# 東方核熱鳥

うーろん茶

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしミリタリーオタクが空に憑依したら、そんな『もし』のお話。

※タイトル変更しました。

# 目次

ステータス
主なステータスとか装備とか ―― 1
プロローグ
プロローグ ―― 8
第1話　たぶん始まり ―― 15
題2話　戦闘描写って難しいんだね
byウラン放出装置 ―― 17
題3話　感動？の再開 ―― 21
東方紅魔郷 〜 the Embodiment of Scarlet Devil〜
第4話　武器追加と紅魔郷開始
26
第5話　VSルーミア ―― 31
第6話　再会、あと⑨戦 ―― 36
第7話　美鈴戦だと思った？残念、違います ―― 43
第8話　紅魔郷ラスト　永遠に紅い幼き月vs幻想の射手 ―― 51
第9話　紅魔郷エピローグ（なのか？） ―― 59
名状し難い空たちの日常のような章
第10話　UA10000越えだー！
by作者 ―― 70
第11話　遂に地底へ!? ―― 78

東方核熱鳥―Ｔｈａ　Ｎｕｃｌｅａｒ　Ｃｒｏｗ―
第１２話　はじめてのせんそう　85
第１３話　反省も後悔もしていない　92
第１４話　なんか色々ごめんなさいｂｙうーろん茶　――――――――　102

# ステータス

## 主なステータスとか装備とか

Ａ＝アタッチメント　Ｃ＝カスタム内容又はその銃自体の特性

霊鳥路　空

・二つ名：リアル幻想殺し

・能力

『核反応を操る程度の能力』

『武器を創造する程度の能力』

・人間友好度　高

・危険度　高

・主な活動地域　幻想郷全土

・装備

Ｍ８２Ａ３

カテゴリ：アンチマテリアルライフル

装弾数：３５
Ｃ（装弾数増加、威力強化、セミ・フル・３バースト切り替え可、反動軽減：マズルブレーキ）
Ａ　銃剣、暗視・赤外線切り替えスコープ：通常のスコープの後ろに取り付けて使用、バイポット、ドラムマガジン、フラッシュライト、レーザーサイト
ＦＮ　ＭＩＮＩＭＩ
カテゴリ：ライトマシンガン
装弾数：２５０
Ｃ（発射速度上昇、弾数増加、反動軽減、取り回し改善：伸縮ストック及び銃身の切り詰め）
Ａ　バイポット、フォアグリップ、大型ボックスマガジン、レーザーサイト、フラッシュライト、ＡＣＯＧサイト、銃剣
ＳＶ―９８
カテゴリ：スナイパーライフル
装弾数：４５
Ｃ（装弾数増加、精度上昇、威力強化、反動軽減、射程拡張）
Ａ　バイポット、銃剣、暗視・赤外線切り替えスコープ、ドラムマガジン、サプレッ

サー

装軌

・二つ名：科学の申し子

・能力

『空想を具現する程度の能力』

『速度を操る程度の能力』

・人間友好度　高

・危険度　中

・主な活動地域　幻想郷全土

・装備

Ｌ１１５Ａ３

カテゴリ：スナイパーライフル

装弾数：５

Ｃ（反動軽減）

Ａ　バイポット、暗視・赤外線切り替えスコープ、サプレッサー
ＡＮ―９４
カテゴリ：アサルトライフル
装弾数：３０
Ｃ（反動軽減、給弾不良改善、初弾と２発目のみ高レート）
Ａ　ホログラフィックサイト及び３倍ブースター、ＧＰ―２５グレネードランチャー、レーザーサイト、フラッシュライト、サプレッサー
Ｐ９０×２
カテゴリ：パーソナルディフェンスウエポン
装弾数：５０×２
Ｃ（反動軽減、発射速度上昇、集弾率上昇、命中率・装甲貫通補正：５．７ｘ２８ｍｍ弾、ドットサイト標準装備）
Ａ　フラッシュライト、レーザーサイト、サプレッサー、銃剣取り付け用ロングバレル
ファイブセブン
カテゴリ：ハンドガン
装弾数：３０

Ｃ（マガジンタイプ…ダブルカラム、装弾数増加、命中率・装甲貫通補正…７５．７ｘ２８ｍｍ弾）
Ａ　ロングマガジン、フラッシュライト内蔵レーザーエイミングモジュール、サプレッサー

フランドールスカーレット
・二つ名…サーチアンドデストロイ
・能力
『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』
『干渉する程度の能力』
・人間友好度　高
・危険度　極高
・主な活動地域　幻想郷全土

・装備
クリス・ケルド×２

カテゴリ：ハンドガン
装弾数：２０×２
Ｃ（反動軽減：クリス　ヴェクターシステム）
Ａ　フラッシュライト内蔵レーザーエイミングモジュール、ロングマガジン、
レイジングジャッジ
カテゴリ：ハンドガン
装弾数：５
Ｃ（使用弾：ショットガン用シェル、一括リロード化、銃身下部レイル取り付け）
Ａ　ロングバレル、スピードローダー、銃剣
レイジングブル
カテゴリ：ハンドガン
装弾数：５
Ｃ（一括リロード化、銃身下部レイル取り付け）
Ａ　スピードローダー、レーザーサイト
クリス　スーパーＶ
カテゴリ：パーソナルディフェンスウエポン
装弾数：３０

Ｃ（反動軽減：クリス　ヴェクターシステム）
Ａ　ダットサイト、レーザーサイト、フラッシュライト
ＤＳＲ―５０
カテゴリ：アンチマテリアルライフル
装弾数：５
Ｃ（銃身上部：吊り下げ式バイポット標準装備、反動軽減：マズルブレーキ）
Ａ　暗視・赤外線切り替えスコープ、銃剣
ＭＧＬ１４０
カテゴリ：グレネードランチャー
装弾数：６
Ｃ（専用サイト標準装備）
Ａ　榴弾専用スピードローダー
ジャッジメント
カテゴリ：高周波振動剣
サバイバー
カテゴリ：高周波振動ナイフ

# プロローグ
# プロローグ

「・・・・・・どこだここ？」

起きた場所が全面真っ白の空間とか洒落になんねぇぞ。
なに？誘拐でもされたのか？俺。

「洒落でもないし誘拐もしておらんぞ」
っ！こいつ、いつの間に俺の後ろに来たんだ？
しかもこいつ俺の心を読んだのか？

「ほう。わしを前にして平然としておる。おぬし中々やるの」
「いや、つーかここどこだよ。あとなんで俺はこんな所にいるんだ？」
「ここは転生の間じゃ。そしておぬしは死んだんじゃよ」

そうだ。俺は既に死んだ身だった。

俺はその日何時もと同じように友人とサバイバルゲームのフィールドに行っていた。
だが、そこへ行く途中の交差点。
そこで、俺は命を落とした。

その日はいつもより道路が混んでいた。

「・・・・混んでるな」
「あぁ」
「やっぱ最初にガンショップに行ったのが間違いだったか」

そう、今日はガンショップにエアガンを買いにいっていたのだ。
「まぁ、この状態でも受付には間に合うだろ」
「だよな」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ!!」

こんな事言ってる奴にこの後何が起こるかなんて予測できるはずが無かった。

俺たちは交差点で車の足止めを喰らっていた。

「・・・・・・長くねぇ?」

「まぁ、もう少し・・・・・・・「お、おい」・・・・・・どうした?」

「あ、あれ・・・・・・」

俺は見た。見てしまった。大型のタンクローリーが普通の運転ではありえない速度で道路を下って来る

のを。

「思い出したか」

「・・・・・・あぁ」

全て思い出した。
俺は確かに死んだ。

「でも、なんでここで意識を持っていられるんだ？」
「それは、わしの部下がミスをしてしまってな。その詫びでおぬしに好きなように転生できる権利を与
える、というのがわしがここに居る理由じゃ」

てことは・・・・・・・・

「うむ。おぬしが考えている通り、わしは神じゃ」

やっぱりか・・・・・・・

「それじゃあ、読者もお待ちかねの転生特典を考えるんじゃ」

「メタ発言すんなよ・・・」

だが、特典か。う～ん・・・・・・・・・・・そうだ。

「なら武器を創る能力と核分裂を自由に操れる能力をくれ」

「それだけでいいのか？もっとできるが」

これ以上いいのかよ。と思ってしまった俺は悪くないはずだ。

「ならバレットＭ８２とミニミ軽機関銃、あとＳＶ９８を固定武装にしてくれ」

「わかった。カスタムはしておくか？」

「それじゃあ頼む」

「うむ。頼まれたぞい」

その後、５時間位雑談をしていた。

約5時間後

「それじゃあそろそろ行くよ」
「うむ。わしと話したくなったら呼べいつでも空いてる」

まさかのＮＥＥＴだった。
じゃあ行くか。っと、その前にこれは聞かないとな。

「俺は何に転生するんだ？」
「あぁ、言い忘れていたわい。おぬしは来世から霊鳥路空じゃ！」
「・・・・・・え？」

俺の死体と対面しているであろう父さんと母さん。２人より先に死んじまってすまない。

あと俺・・・・・・・・・・・・・霊烏路空に憑依したみたいです。

# 第1話　たぶん始まり

やぁ、みんな。
無事に憑依ってか転生出来たみたいだ。
それで今私（今は女だし）は主人である古明地さとりと話をしている。

「ではあなたは神に転生させてもらったと」
「はい」
・・・・・・・・うん、早速転生したってばれたよ。そりゃあ見事に。
「覚妖怪ですから」
「さらっと心を読まないでください。その方が楽ですけど」
・・・・・・・・・・・・・・・・まぁそれより報告しようか。今の会話でわかると思うけどやっぱり空に憑依してたよ。
んで、次に能力だけど今ある能力が『核分裂を操る程度の能力』と『武器を創造する程度の能

力』の２つだった。『核分裂を操る程度の能力』は聞いてわかるとおもうけど、『武器を創造
する程度の能力』は自分が武器だと思ったものならなんでも創れるのだ。
一言で今の心境を語るとするなら「どうしてこうなった」だろうね。これ以外に何かあったと
すると頼んだ武器が魔改造銃だったことかな。Ｍ８２は反動軽減機構が搭載されて、ミニミは
ホントに軽機関銃か？と思える位に発射速度が上がった。ＳＶ９８は精度と装填数がかなり上
がってた。てかＭ８２とＳＶ９８はドラムマガジンになってた。わかる？ドラムマグが付いた
狙撃銃なんて。あと全部銃剣が付いてた。
これはひどい。

# 題２話　戦闘描写って難しいんだね　ｂｙウラン放出装置

「弾幕ごっこをしてみましょう」
「唐突ですねさとり様」
やぁみんな、いきなり弾幕ごっこをすることになった空です。
まぁ今の状況を表すと
ここの生活に慣れる
←
後なんかすることある？
←
さとり「そうだ、弾幕ごっこしよう」←今ここ
というわけだ。
とりあえずスペカは作ってるからいつでもできるのでさとり様とやってみることにした。

第三者視点

「では先手は私が頂きましょう」
と言ってさとりが弾幕を展開するが空はミニミを取り出し応射した。

空視点

「では先手は私が頂きましょう」
と言い弾幕を放ってくる。だが、私もそう易々と当たる訳にはいかない。とりあえずミニミを取り出し、三点射で撃ってみる。
ちなみに銃弾には妖力のコーティングをしているから死ぬことは無い。
そうしている内にさとり様に弾幕が当たったらしい。
「もう当てて来ますか。初めての割りには強いですね」
「そりゃどーも」
原作をやってるからだなんて死んでも言えない。
「ではそろそろいきます」
そう言ってさとり様はスペルカードを掲げる。

想起「テリブルスーヴニール」

・・・あれこれ難易度イージー？

まぁ今回は反撃できるか分からないし避けに専念しよう。

「いたぁ！」

一発被弾してしてしまった。

しょうがない。私もスペカを使ってみよう。

「なら私もいきますよ」

丁度さとり様のスペカも時間切れで終わったところだ。

「いきますよー」

銃符「ヘルズショットガン」

このスペルカードではＡＡ―１２というフルオートショットガンを使い、００バックショット、フレショット、フラグ、スラグの順に撃つということを時間切れまで続けるというものだ。

因みにバックショットは１６０度に小弾を放ち、フレショットは最初は一直線だが空中で散開する弾、フラグは空中で爆発し全方位に小弾をばらまき、スラグはレーザーを

一発撃ってその後レーザーから小弾がばら撒かれる、と言った具合である。

配分はバック３フレ２バック４フレ３フラグ１バック５フレ４フラグ２スラグ１と段々多くなっていくがスラグを撃ったらバック１に戻る。

途中までさとり様は避けていたがスラグからばら撒かれた小弾に当たり、そのままバックショットに当たりまくって落ちてった。・・・・・・・・・・・・・・・・

ん？落ちてった？

威力高すぎた！

「さとり様ー！」

これは後で説教かな・・・・・はぁ、鬱だ。

なうろーでぃんぐ…………

# 題3話　感動?の再開

やぁみんな、霊烏路空ですよ～。

唐突だけど武器を増やそうと思う。

『え?増やすの早くね?』と思っている画面の前の諸君、この小説は『色々おかしい』がコンセプトなんだよ!

嘘だけど。

まぁ武器が多いに越したことはないからね。

それで今回造る（誤字にあらず）のは核エネルギーで動くレールガンなんだけど造るのに河童の協力が不可欠なんだよ。

という訳でちょっと地上に出ようと思う。ついでに博麗神社に行こう。異変起こすの面倒だし。

～地上～

地上に出てきたのはいいけどどこから行くかな。・・・・・・・・・・・・・・・・・よし、先ずは博麗神社から行こう。
そうと決まったら早く行こう。主目的は河童、願わくばにとりと会う事だし。

～博麗神社～

博麗神社に来たのはいいけど・・・・・・私の目の前に神っぽい人が居るんだよね。
「この博麗神社に来る物好きなんて居たんだ・・・・」
「いや誰ですかあんた」
東方にこんなキャラは居ないはずだ。ということはこの人も私と同じ?
「あぁごめん。私はこの博麗神社の神、博霊零夢だよ。君は?」
読みが霊夢とかぶってるよ。もっといい名前考えられなかったのかな作者は。

まぁ名前聞かれたから答えよう。
「霊烏路空。地獄烏だよ」
「霊烏路空？君が？」
「そうだけど？」
普通に答えた筈なんだけどなー。
「彼女が空？いやそんなはずはない。空は確かもっと背が高いはずだし空は馬鹿キャラのはず・・・」
あぁ、なるほど。原作知ってたのか。
因みに私の容姿は空を幼くした感じだ。うーん、例えるなら空子供ｖｒｅ．てとこかな。
さとり様には「お空が銃を持っていると違和感がすごいわ」と言われた。まぁ見た目子供が対物ライフルとか軽機関銃持ってたら違和感あるよね。
「君はほんとに空なのかい？」
「それ、私以外に言ったら頭おかしい奴って思われるよ？」
ここまで私が言ったとき。
ピピッピピッ
「ん？」

私の持っている連絡用、情報整理用のＰＤＡが音を鳴らした。今連絡できる人物?は１人だけだ。
「はいはい。何ですか神様?」
〈いや何、お主等お互いのことを知らないと思ってるようだからの。おぬしら自分と一緒に死んだ人物覚えとらんのか?〉
「え?おたがいって?」
零夢はわからないようだが私はわかった。正直こいつの方が馬鹿だからなー。
「零夢、お前前世の名前焔《ほむら》だろ?」
「なぜわかったし」
「一緒に死んだから」
「おｋ把握。会いたかったよ九十九《つくも》」
焔、九十九、私達の前世の名前だ。
「まさか空に憑依してたか」
「そっちは神様に転生かよ。いいご身分だなおい」
「そうでもないぞ。参拝客は居ないって言うか来れないからね」
「セントリーガンでも置いていこうか?」
「あ、いいねそれ。じゃあ頼むよ」

「おうよー」

という感じに出だし好調な地上のお話でしたとさ。

ちなみにセントリーガンはＭ２重機関銃をベースにした。

なうろーでぃんぐ

# 東方紅魔郷　～ｔｈｅ　Ｅｍｂｏｄｉｍｅｎｔ　ｏｆ　Ｓｃａｒｌｅｔ　Ｄｅｖｉｌ～

## 第４話　武器追加と紅魔郷開始

やぁ、感動？の再会を果たした空だよ。

今は妖怪の山に来て天狗に許可貰ったとこなんだけど・・・・・・・・・・・・

「なんでこんな所で戦闘なんかしてんのかね、あれは。」

え？何がいたかって？

博麗霊夢と⑨チルノ。

あ、夢想転生使った。えーとライオットシールドは・・・・・・あった。そいじゃ構えて・・・・・受ける！

ガガガガガガガッ！

・・・・すげぇ。でも進めないし私から仕掛けるかな・・・・・・・・・チルノに。

銃符「フルメタルジャケット」

ミニミを取り出しＦＭＪ弾を装填、チルノを照準して・・・ファイア。

パラララララ！
「え？いやちょっと待っt」ピチューン！
よし、サプレッサー付けてばれないようにしてたし河童のとこに行こうか。

～滝

～

この辺にいるって話なんだけど・・・・・光学迷彩でも使ってんのかね？
とりあえず赤外線スコープで・・・ん？
真横で見られてた。
「やぁ、君面白いものもってるね」
「あげようか？」
「いいの!?」
「うん。いくらでも創れるし」
「ありがと！あぁそうそう、私は河城にとり。河童だよ」
「霊烏路空。地獄烏だよ」
「ところで何か用かい？」

「うんちょっと」
「わかった。まぁ立ち話もなんだし来なよ。中で話そう」

～にとりの工房～

「・・・・・ていう訳なんだけど」
「それならすぐに造れるよ。３タイプ位造ってあげるよ」
　ｍｊｄ？
「じゃあ頼むよ」
「わかった。できるのに４日位かかるから泊まっていきなよ」
「ありがと」

～４日後～

　どうやら本当に３タイプ造ったらしい。
「まず１つ目は高威力タイプ、２つ目は連射タイプになってるよ。３つ目は広範囲殲滅タイプ、威力と範囲を上げたせいでエネルギーの消費量がすごくなったよ」

それでも十分凄いんだけど。
まぁそのまま出てきたんだけど・・・・・・・・・・・紅い霧が出ています。本当にありがとうございました。
まさかの紅魔郷だよ。

東方紅魔郷～ｔｈｅ　Ｅｍｂｏｄｉｍｅｎｔ　ｏｆ　Ｓｃａｒｌｅｔ　Ｄｅｖｉｌ～

・プレイヤー選択
～幻想の射手～
霊鳥路空
移動速度・★★★
攻撃範囲・★★★★★
攻撃力・★★★★
・使用する武器を選択してください
軍符「ワンマンアーミー」

電磁「レールガン」

少女祈祷中…

# 第5話　VSルーミア

Ｓｔａｇｅｌ
夢幻夜行絵巻～Ｍｉｓｔｉｃ　Ｆｌｉｅｒ～
ＢＧＭ「ほおずきみたいに紅い魂」

やぁみんな。霊烏路空だ。
紅い霧がでたから紅魔館に行ってるんだけど、妖精が弾幕出してきて面倒だね。
あ、また来た。
バララララララララ！　　ピチューン
面倒だな・・・・・・・・・・・・・・・ん？なんだ？辺りが真っ暗だ。

「あなたは食べてもいい人類？」
　ああ、ルーミアか。
「残念ながら人じゃないんだなこれが」

　ってか背中に羽ついてんじゃん。
「そーなのかー」
「そーなのだ」
「でも食べれるなら今は何でもいいのだー」
「えー・・・・・・」
　これはバトル展開だね・・・・・・・・はぁ、めんどい・・・・・・・

　ＢＧＭ『妖魔夜行』

　ルーミアがおなじみの両手を横にするポーズをとると、私を含めた空間が真っ暗になる。うーん、どうしよう・・・・攻撃しようにも真っ暗だしなー。
「どこにいるのだー?」
　暗視ゴーグルは・・・・・・だめか。
　暗くても使えるはずのゴーグルを覗くが何も見えない。

そもそもこれは少しの光を増幅して見える様にする物であり、そもそも光がないとつかえない。
まぁ、見えないのはあっちも一緒だけど・・・・・・あぁ、これならいけるかも。
とりあえず最初にバレットを適当に撃つ。
ドウン！ドウン！
「そこかー？」
よし、かかった。
そして一つの筒を取り出し、上についたピンを抜き・・・・なげた・・・声の聞こえたほうに。
パァァン！
一瞬で辺りが明るく照らし出される。
そう、私が投げたのは『フラッシュバン』という閃光を発する手榴弾だ。
しかも爆発した場所が
←目を閉じて耳を塞いだりして準備完了
私　　フラッシュ　１ｍ　ル
　　地面
て感じだ。え？よくわからん？要するにルーミアの目の前で爆発したってこと。

それに加えて今まで真っ暗だったところでいきなり明るくなったらどうなると思う？

「目があぁぁぁ、目があぁぁぁ!?」

こうなるんだよ。

でも某大佐と同じこと言うとは思わなかったな。

よし　閃光「フラッシュバン」となずけよう。

と浮かれていた時期が私にもありました。

目の前にルーミアがいて喰う気満々だった。

「あ・・・」

「いただきｍ・・・ぼふっ!?」

ん？なんかのけぞった。ならこの隙に！

銃符「ヘルズショットガン」

ダダダダダダダッ！

全弾当ててやったら気絶したみたいで倒れていた。

なんでいきなりのけぞったかは知らないけど先ずは打倒レミリアだね。

???視点

危なかったー。

私が狙撃しなかったらどうなっていたことか・・・・・・

少女祈祷中…

# 第６話　再会、あと⑨戦

Ｓｔａｇｅ２
湖上の魔精～Ｗａｔｅｒ　Ｍａｇｕｓ～
ＢＧＭ「ルーネイトエルフ」

やぁやぁみんな、霊烏路空だｙ「えいっ！」黙ってろチクショウめーい！
『ヴゥゥゥゥン！』ピチューン！
・・・はぁ。さっきから妖精がウザ過ぎるよ。今の挨拶テイク３８だよ？もうすげーイラつくからＭ６１バルカン使っちゃったじゃん。
それより、さっきから誰かにストーカーされてる気がすんだけど。え？なんで分かるんだって？だって妖力垂れ流しだよ？分かんない方がすごいって。
・・・・よし、捕まえよう。先ずはフラッシュバンを出して。ピンを抜いて。投げる。
（後ろに）『パンッ！』んで突撃！
「うおっまぶし！」

幻想郷にはネタが流行ってるのかな?にしても何か聞き覚えのあるような・・・・

「動くな!」
「断る!」
「マジデ!?」
「マジデ!」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「なぜ死んだし」
「姉さんが死んだから」
「姉さんっておｍ「間違いじゃ無いでしょ?」そうなんだけどさぁ・・・・」

やっぱ何時も『兄さん』だったから違和感が半端じゃないんだよねぇ。
それはそうと、妹・・・装軌の装備もすごい事になってるな。Ｌｌ５Ａ３にアバカン、挙句の果てにはＰ―９０が２丁って・・・

「ちょっとそこの妖怪２人！」

あーくそう、次から次へと・・・・・

「なに？」「なんなんだよさっきから・・・」

ちょっと今イライラしてるんだけどなぁ～。

「ここはあたいの縄張りよ！死にたくなかったら出て行きなさい！」

やっぱチルノか。知ってる？スペルカードルールはほとんど死ぬことは無いんだよ？

でも私紅魔郷やってないからなぁ。ま、そん時はそん時だね。

「装軌、援護よろ」

「おｋ、今はこれがあるから期待してくれていいよ」

と言って装軌はＬ１１５Ａ３を見せる。

「よし、逝くぞコンニャロー！」
「ちょ、姉さん字が違うって」

ＢＧＭ「おてんば恋娘」

「いくわよ！」
「やらせねぇよ!?」

とりあえずミニミを撃ってスペルを発動させないと。

ダダダダダン！

「きゃあ！やるじゃない！でもこれをかわせる？」

氷符「アイシクルフォール」

交差弾!?・・・・・ん?これって・・・・チルノの目の前が安置じゃん。なるほど、だから馬鹿なのか。ならこちらも。

電磁「レールガン」

イィィィィィン・・・・ドガァァァァン!

うわ!?うるせえ!これは音をどうにかしないとな。

「ちょ、はやっ!しょうがないわね。次いくわよ!」

なにがでるかな、なにがでるかな、デデデデッデンデデデデン♪

凍符「パーフェクトフリーズ」

凍符・・・豆腐?

・・・・これは単なるばらまき弾か。すげー楽。

「この程度?」

「それはどうかしらね!凍れ!」

「なっ!?」

弾幕が凍った!?くそ、前後左右から・・・・・・

ビシッ!ビシッ!ビシッ!

よし!ナイスタイミング装軌!

装軌がつくった抜け道を通る。よし、抜けた。

「こっちもとっておきを出してやるよ」

核熱「ニュークリアフレイム」

このスペルは言ってしまえば火炎放射器だ。ただ、私の核分裂の能力でできた熱だから温度は普通の火炎放射器よりかなり高い。

要するに、対チルノ用スペル。

「あつ！きゃあぁぁぁぁぁぁ！」ピチューン！

そういえばここでは被弾音は妖精の一回休みの音みたい。

さて、じゃあ行こうか！

「おいて行くなー！」

「・・・・忘れてた」

最後の最後まで締まらない空であった。

少女祈祷中…

# 第７話　美鈴戦だと思った？残念、違います

Ｓｔａｇｅ　３

先生、３面のステージ名忘れました。～犠牲になったのだ。作者の知識不足という名の犠牲に、な～

ＢＧＭ「明治十七年の上海アリス」

「装軌、そっち行った」

「おーらい」

『タタンッ』ピチューン！

さっすがアバカン！さっすが装軌！撃ちもらしの対処も早い。

うん、妖精の弾幕も濃くなってきた、そろそろ紅魔館に着くかな。

『ｐｐｐ・・・ｐｐｐ』

ん?また神さん（呼び方は気分で変わるよ!）からだ。

「『ピッ』なんぞ～?」

〈なんぞとはなんじゃなんぞとは〉

「えっとね、「何ですか」の言い方のバリエーションの一つだよ」

〈そっちの事じゃない!〉

「え、そうなの?」

〈はぁ・・・・・それよりちょっとお主に渡すものがある〉

「渡すもの・・・・・ＭＯＡＢでもくれんの?」

〈（もう突っ込まないもう突っ込まない・・・・・）サポート用のＡＩじゃ〉

「なーんだ、何かと思ったら。あれでしょ?あの『戦闘モード、起動』とかって言うやつでしょ?」

〈いや、全世界のスパコン使ってもお釣りがじゃらじゃらくる性能に人と比べても遜色無い人格を搭載しておる。と言うか魂そのものじゃな。〉

「なにそれ鬼畜」

〈北欧の最高神舐めんな〉

「サーセンした」

北欧の最高神ってオーディンじゃん。すげー大物と話してたんだね、私。

「でもなんでこんなに優遇されてんの？」

〈まぁお主等が死んだのはこっちの責任じゃし、一回転生するとそれ以上転生できないんじゃ。歪んだピースをパズルに使えないのと一緒じゃよ。じゃから、死なないように能力を授けてるんじゃ〉

「なるほど。そういや他に転生・憑依者っていんの？」

〈うむ、そこから一番近いのは・・・フランドールスカーレットじゃな〉

「え」

〈確か特典は高周波による振動で切れ味を増し熱を帯びさせることも可能な高周波振動剣［ジャッジメント］とそれのナイフ版である［サバイバー］フランドールの「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」の副作用を無くす、あとは「干渉する程度の能力」じゃな。じゃあＡＩ送るぞ〉

「はいよ」

〈・・・・起動しました。はじめましてですね、私の名前はＡＩ―ｔｙｐｅ０２ツヴァ

イです。〉
「型番までご親切にどうも」
〈いえいえ、ユーザーでありマスターですから〉
〈よし、あと特には無いの。じゃあまたの〉
「はいはーい」
〈オーディンとの通話終了しました。あと目の前の門番はサボってますね〉
「いやこれ気絶してるだけだと思うよ?」
〈でしょうね。目標地点に多数の妖力反応と霊力反応を確認しました。どうします?〉
「とりあえず行ってみよう。美鈴が気絶してたってことは主人公二人がいるだろうし」
〈いえ、霊力は博麗霊夢と霧雨魔理沙に酷似していますが微妙に違うようです〉
「なにそれ別人?」
〈その可能性は高いかと〉
「んじゃ行って見よう。空気状態の装軌さーん、行くぞー」
「私最初の一言しか言ってないよ・・・・・」

ごもっともで。

Ｓｔａｇｅ　３　クリア？

～紅魔館内部～

視点変更：装軌

やっと私だ。え？なんでお前の視点？って人は大丈夫、作者が「流石に二つの小説同時進行は無謀だったからこっちに融合するわ」って言ってたから。

「姉さん姉さん、そろそろ主人公組が近いよ」

「いや、ツヴァイが言うには似てるけど違う人物らしいよ」

「へぇ」

まぁ全部原作通りだとつまんないしね。ん？

「姉さん、あれじゃない？」

「え？あ、ほんとだ。でも三人いる」

「うそぉ、んなことあるわけ・・・」

そう言ってスコープを覗き込む。え?･なんであいつ居んの?

「フランだ」
「嘘だ！」
「なぜここでレナのネタを使ったのかは知らないけど本当だよ」

私が信じられないのだろう。まあ私も原作のエクストラに行ってないのにフランが地下じゃないなんてぶっちゃけ信じられん。

「・・・・・ほんとだ」
「でしょ?」
「うん、ＺＵＮ帽着けてないからわかんなかった」
「んじゃ行こうか。おーい！」
「ん?誰ですかあなた達」
「えーと、私が装軌でこっちが霊烏路空」
「私は博麗霊奈です。博麗の巫女をやってます」

「霧雨魔理亜だ、よろしく頼むぜ」
「フランドールスカーレット、フランって呼んでね」

やっぱ原作と違うね。名前も顔立ちもほぼ同じ。

「ところでフラン。私達はこの異変を解決しに来たんだけど」
「知ってる。お姉さまのとこに案内するよ」
「止めないの？」

と姉さん。

「うん。そもそもあんな霧出す必要が無いから」
「なんでですか？」

と霊奈。

「私の能力で私とお姉さまの弱点を［当たると死ぬ］からせいぜい［ちょっと苦手］程度

にしてるから。でもお姉さま「もしちゃんと機能してなかったらどうするの！」って涙目で言って聞かなくてね」
「なるほど、つまりカリスマブレイクか」
「そういうこと。じゃあついて来て」
「了解」
「あいよ」
「わかりました」
「わかったぜ」

少女祈祷中…

# 第８話　紅魔郷ラスト　永遠に紅い幼き月ｖｓ幻想の射手

視点…空

「ここだよ」
「サンクス」
「ここに異変の元凶がいるんですか？」
「フランが言うんだからそうなんじゃないか？」
「まあ一番上の階、しかも装飾もかなり凝ってるからね。どうする姉さん？」
「もちろん叩きのめして異変解決に決まってんじゃん」

え？なにキンクリしてんだって？だって咲夜出てきた途端全員のスペル食らって瞬殺したし、他に面白い事無かったからね。

「さて、んじゃちゃっちゃと凹ってさっさと宴会しよう！」

「・・・・・ちなみにどこで？」
「んなもん博麗神社に決まってんだろ！」
「後かたずけするこっちの身にもなってくださいよ・・・・・」
「まぁまぁ、かたずけ手伝うから」
「ありがとうございます空さん・・・」
「おねーさまー」
「「開けるの早！」」
『ギィィィィ・・・・・・』

なんかホラー映画にありそうな音だな。

「どうしたのフｒ・・・後ろのは？」
「異変解決」
「簡潔に言うわね・・・まあいいわ、異変を終わらせたいなら私に勝ってみなさい！」
「わかった」
「誰が逝く？」

「姉さん・・・字が違うよ」
「そんなこと無いよ。ってな訳で私がやるって事でいい？」
「「「どういう訳で!?ッハ!?」」」
「まあ私がやるから」
「まあ別にいいが・・・負けんじゃないぜ？」
「そこはだいじょぶだよ」
「話し合いは終わったかしら？」
「終わったよ」
「ならさっそく外に出ましょう。中はいろいろとまずいわ」
「わかった」

～紅魔館　中庭～

「さて、今回の勝負のルールだけど、弾幕以外に近接攻撃もあり、能力の使用もあり、勝敗は・・・そうね・・・先に気絶したほうが負けにしましょう」
「わかったよ、容赦しないよ？」
「せいぜい足掻くといいわ」

そこまで言うとレミリアは天を仰ぐように上を向いた。そこには雲一つない晴天の夜に浮かぶ紅い満月があった。

「こんなにも月が紅いから」「こんなに月が紅くても」

一泊おいて

「本気で殺すわよ！」「私は何色にも染まらない、ってね」

ＢＧＭ「亡き王女の為のセプテット」

視点：フランドール

「いくわよ！」

「来いや！」

お姉さまの声と共に弾幕が展開、空に向かっていくが。

「グ、グ、グレイズ！」

　といいながら回避、お姉さまに近ずきショットガン、たぶんイサカＭ３７かな？を零距離射撃。

『ガウン！ガシャッ、ガウン！』

「きゃあ!?何よそれ！」

「御生憎様、私はこっちが好きなんだよ。ハハッ！」

　うわぁ、笑いながら戦ってるよ。多分元々がネタ満載な性格なんだろうけどあれじゃあ戦闘狂と間違えられるよ。

「あの人・・・笑いながら戦ってる・・・・・」

「空は戦闘狂なのか？」

「いや、あれは姉さんの元々の性ｋ「元々性格が変だからー！でも戦闘狂じゃないよー

！」・・・て言うこと」

「なるほど」

やっぱり間違えられたね。それにしてもよく聞こえるなー、ギャグ補正？

「くっ！これじゃ埒があかない！いくわよ！」

必殺「ハートブレイク」

まあできて２コストだよね。でもたぶんお姉さまはこれが絶対当たるように運命操作してる、さあお空どうする？

シュウウウン・・・バアアアアン！

「ッ！これはひどい！」

ドガアアアアン!!

「ハァ、ハァ・・・さすがにこれで「いやー危なかった」嘘!?当たった筈なのになんで平気なの!?」
「え?・いや、あれは絶対当たると思ったから掴んで防いだだけだよ?・それじゃあ私も、５コストでやってやんよ」

銃舞「ワンマンアーミー・ガンパフォーム」

ガシャガシャガシャガｓ（ｒｙ

という音と共に地面に落ちてくる銃（重）火器。アサルトライフルやサブマシンガン、挙句の果てには８８ｍｍ高射砲『アハト・アハト』まである。
それをお空はまるで踊るように拾い、撃っていく。

ダダダダダダ!バララララララ!バシュン・・・ドガアァン!バスン!ガシャン、バスン!イィィィィィン・・・ヴゥゥゥゥン!ガシャ、ドゥゥゥン!

「すごい・・・・」

こう呟いたのは誰だっただろう。意外と私かも知れない。とにかく私達は人を『殺す』為の武器を踊るように扱う空に見とれていた・・・・・

この後お姉さまが犬神家状態になってて笑った。

東方紅魔郷　～　ｔｈｅ　Ｅｍｂｏｄｉｍｅｎｔ　ｏｆ　Ｓｃａｒｌｅｔ　Ｄｅｖｉｌ～　ＥＮＤ

# 第９話　紅魔郷エピローグ（なのか？）

ＢＧＭ：幽閉サテライトより東方Ｖｏｃａｌ「色は匂へど散りぬるを」
～博麗神社境内～
視点：空

ざわ・・・・・ざわ・・・・・
がや・・・・・がや・・・・・
ざわ・・・・・ざわ・・・・・
がや・・・・・がや・・・・・
ざｗ（ｒｙ

「そうきー場所取るから手伝ってー」
「はいはーい」
「あ、じゃあ私も行く！」
「レミリアはいいの？」

「大丈夫じゃない?」
「そう?んじゃ手伝って」

こんにちは皆さん、絶賛場所取り中の空他数名です。
え?なんの場所取りかって?宴会ですよ、宴会。
異変が終わると宴会になるって本当だったんだね。
でもそれにしても人多すぎない?

「ねぇ零夢」
「ん?」
「いくら宴会にしてもこんなに博麗神社に人ってくるもん?」
「ああ、それ?お前が置いてったセント君を霊奈が増やしたおかげで里の人間も安全に来れるようになったんだよ」
「ふやしたぁ?」
「あれ、あいつ言ってなかったか。霊奈には「主に空を飛ぶ程度の能力」以外に「複製と消滅を操る程度の能力」を持ってるからその能力でセントリーガンを複製したんだよ」
「へぇ、つくづくチートだな」

「お前に言われたくはねぇよ」

ですよねー

「ええと、ここがこうで・・・・・・・なるほど、近くで声を出せばいいのかぁそれじゃあ早速・・・・・皆さん、本日は博麗神社の宴会にお越し頂き有難う御座います！司会は私、博麗の巫女兼現人神、博麗霊奈が務めさせて頂きます！」

／ミミガアァ／

／イイゾモットヤレ／

「まず、皆さんに異変を起こした妖怪を紹介します！レミリアさん」

「わかったわ」

カツ・・・カツ・・・

「私は紅魔館の吸血鬼、レミリアスカーレットよ」

＼アンタノセイデフクガアカクナッチマッタダロ！／

「まぁまぁ、そう怒らないで。では次、異変を解決した妖怪です。空さん、どうぞ」
「はぁ!?私!?」
「レミリアさんを倒したのはあなたですよ?」
「ぐっ・・・・はぁ、わかったよ」

ガシャ・・・ガシャ・・・

「あー、地底の地霊殿に住んでる地獄鳥の霊鳥路空です。今後ともよろしく」
「はいここで質問タイム！何かありますか?」

（・∀・）ノ　（^ω^）ノ　（。∀。）ノ　ハイハイ！

「はい一番右の人！」
（。∀。）「何でそんな重装備なんだ?」

「仕様だ！」
（。∀。）「そーなのかー」
「受け流した・・・だと・・・」
「それで、実際どうしてそんな重装備何ですか？」
「ええと、それはカクカクシカジカで・・・」
（。∀。）「四角い○ーヴなんだね」
「そういうこと」
「では次は・・・もう順番にいきましょう」
（^ω^）「能力はなんですか？」
「武器を創造する程度の能力と核分裂を操る程度の能力だよ」
（^ω^）「ｏｈ・・・・・」
（・∀・）「じゃあ私は・・・そうだ！どれ位生きてるんですか？」
「一週間ちょっと」
（・∀・）「・・・・・・・・ほんとに？」
「うん」
（・∀・）「・・・・・・うわお」
「ということで質問コーナーも終わりましたし皆さん、自由に飲んだり食ったりし

ちゃってください！」

「「「「「「「「おぉぉぉぉぉぉぉぉお!!!!!!」」」」」」」」

視点：そして誰の視点でもなくなった

その後はそれこそお祭り騒ぎだ。酒を交わす者、食事をする者、多種多様というやつだ。その時空達はというと・・・・・

「フランは俊敏性重視?それとも純粋な威力重視？」

フランの武器を考えていた。

「うーん、俊敏さとパワーの両立してる武器だなぁ、私は」

「それじゃあ・・・大口径ハンドガンかサブマシンガンとグレネードランチャーかな」

「うーん、それだと遠距離に対応できないんだよね」

「じゃあスナイパーライフルも追加？」

「大口径のせめてＭ７００で」

「大口径・・・連射より精度だろうから・・・はい、候補」

と言いつつフランに紙を渡す、そこには。

ハンドガン

ＭＫ４５

ＭＫ２３

デザートイーグル

クリス・ケルド

トーラス・レイジングジャッジ

トーラス・レイジングブル

コルト・Ｍ１９１１ガバメント

コルト・パイソン

サブマシンガン

ＴＤＩ　ＫＲＩＳＳ　Ｓｕｐｅｒ　Ｖ　Ｖｅｃｔｏｒ

Ｈ＆Ｋ　ＵＭＰ―４５

ＭＰ５

ＭＰ７

ステアーＴＭＰ

イングラムＭ１０
ＵＺＩ
スナイパーライフル
Ｈ＆Ｋ　ＰＳＧ―１
ワルサー　ＷＡ２０００
Ｌ９６
ＡＲ―５０
ＡＷ５０
ＡＳ５０
ＰＧＭ　ヘカートⅡ
ゲパード
ＦＮ　Ｂａｌｌｉｓｔａ
レミントン　ＭＳＲ
ＤＳＲ―５０

と様々な銃の名前が書かれていた。

「うーん、じゃあハンドガンはクリス・ケルドが二挺とレイジングジャッジ、レイジングブルを一挺ずつ、あとヴェクターとＤＳＲ―５０にするよ」
「ハンドガンだけで四挺とかまじ鬼畜」
「いいじゃん別に」
「んじゃあ今度渡す「ああアアアアアアアアアア□□□□!!」・・・・・今渡すしかない？」
「そうだね」
「ちょっと待ってね・・・・っと、はいこれ。グレネードランチャーはまた今度ね」
「ありがとー。じゃ、妖怪退治・・・しようか？」
「妖怪が妖怪退治って・・・・私は疲れたからパス」

～博麗神社前～

視点：フラン

「それじゃあ早速逝こうか！」

『ガシャ、ダダダダダダダダダダダン！』

「うわなにをするやめｒぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！」

「ここに来たお前等が悪い！」

バスゥン！グシャ！

～しばらくお待ちください～

「いやー殺った殺った」

「・・・・・・こっちはＳＡＮ値が一気に削れたよ・・・」

「それより早く宴会行こうよ」

「はぁ・・・肉体的にも精神的にも疲れたよ・・・」

この後宴会は深夜まで続いた。

—END—

# 名状し難い空たちの日常のような章
# 第１０話　ＵＡ１００００越えだー！ｂｙ作者

～人里付近の森～
視点：団子屋の息子

「ギャア！ギャア！」
「くそ！なんなんだよ、俺が何したっていうんだ！」
「ギャア！ギャア！」

俺はただ団子に使う材料を採りに来ただけなのに、何でこんな時に限って妖怪がいるんだよ！
くそ、こんな事ならケチらずに退魔符を持ってくればよかった！

ゴッ！ズザアアア！

「ウグッ！」
「ギャア！ギャア！」

いってぇ・・・・どうやら木の根に足が引っかかって足を捻ったか、立とうとしても足に力が入らない。
猿のような妖怪が自分が圧倒的に有利なのが分かったのかゆっくりと近づいてくる。
「なんでだよ、なんで俺がこんな目に遭わないといけないんだ・・・・誰か・・・・誰でもいいから・・・・・助けてくれよ・・・・・・」

ブゥン！ジュウッ！
「ギャア!?」
その後の事は覚えていない。

～同時刻～
～人里～
視点：フラン

やあみんな。この頃空よりも出てる回数が多い気がするフランだよ。
それより普通に挨拶してるけど実は紅霧異変から既に１００～２００年ぐらい経ってるんだよね、何か他の異変起こらなかったし。
それと判ったことがあってさっきも言った通り原作の異変が殆ど起こってない以外に、この世界に殆どの転生者がいることが判った。まあ総人数は私を含めて４人しか居ないらしいし最後の１人はにとりだったからもう全員揃ったんだけど。
あと空は無事神奈子達から八咫烏の力をもらったよ。その時に能力が融合して「核反応を操る程度の能力」になったみたいでテンションが最っ高にハイってやつになってたからグレネードランチャーで鎮圧しといた。
まあそんなこんなで転生者４人組で人里に来たんだけど・・・・・。

「すごい慌ただしいけど何かあったのかな？おーい、店主！なにかあったの？」

空も同じ考えだったようで近くの団子屋の店主に聞いた。

「ああ！丁度いいときに来てくれた！お願いです、息子を助けてください！」
「いや詳細を教えてくれないとどうしようもないですよ」
「す、すいません。実は俺の息子が近くの森に退魔符も持たず材料を採りに行ってしまったんです。いつもは担当の者が採りに行っているのですが風邪で休んでいたんです」
「それで息子さんが採りに行ったと。大方妖怪にでも襲われてるってとこですかね？」
「話が早くて助かります。どうか息子を助けてください！」
「おｋ、わかったよ」
「あぁ、あなた達は神か・・・・」
「「「妖怪だよ!?」」」

視点…空

「ギャア！ギャア！」
「あいつだね、フランは突撃、にとりはフランの援護、装軌は狙撃ね。時間さえ稼いでくれれば私が
〝アレ〟で終わらせるから」
「「わかった」」
「よし・・・・ＧＯＧＯＧＯ！」

フランがＤＳＲ―５０とレイジングジャッジにジャッジメントとサバイバーを銃剣として取り付け突撃し、にとりがＧ３６で援護、隙ができると「ＳＭＡＷ」ロケットランチャーを撃ち込む。装軌はＬ１１５で遠距離狙撃を行っている。私はというと、とある装備を装着した。金属製装甲版のフレームの各部にプロテクターが付いていて、背中には戦闘機と同じウイングを体に対し垂直に付いておりウイングのウエポンベイにはサイドワインダーを初めとする各種ミサイルや対地攻撃用の機銃が入っている。

名称は「アームズノート」ちょ、みんなネーミングセンス無いとか言わないで！
因みに私は航空機タイプ、装軌は各種戦車タイプ、フランは自走砲と自走ロケット砲タイプ、にとりが装甲車、歩兵戦闘車タイプだ。
あと使用するエネルギーは小型の核融合炉と核分裂炉を一緒に使っているからエネルギー切れの心配は無い。

「さてと、Ａ―１０行きますよっと」

おーおーまだ生きてる、ま、すぐ死ぬけど。

「お三方、団子屋の子を連れて退避、機銃とミサイルの掃射を行う」
『了解』
『じゃあ私が連れて行くよ』
『早く逃げよう』
「じゃ、団子屋の子は任せたよ」

背部ブースターで加速し妖怪に接近、ウエポンベイから空対地ミサイルとＭ１３４ガ

トリングを取り出し、スペルを宣言。

殲滅「アームズ・デストラクション」

イイイイイン・・・・・ヴウウウウウウウウン！バシュバシュバシュウウウン・・・

ドガァアアアン！

スペルが終了した時妖怪は跡形もなく消え去っていた。まぁ非殺傷設定解除してたしミサイルとＭ１３４の一斉掃射食らって生きてる方が可笑しいんだけどね。

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

――――――

「本当にありがとうございます！」

「いえいえ、私達に出来る事をしただけですよ」

「いや、あんた達が来なかったら俺は死んでたよ。ほんとにありがとう」

「うん、じゃあまた何かあったら言ってよ」

数百年経っても幻想郷は平和です。

なうろーでぃんぐ・・・

# 第１１話　遂に地底へ!?

「そういえばお空。地底の間欠泉センターはどうするの?」
「あーそういえばこの頃地底行ってないなぁ。」
「偶には帰ったら?」
「うーん・・・帰ってもいいんだけど・・・」

空は博麗神社の境内に寝そべりながら言う。

「けど?」
「ただ帰るって決められるのは嫌なんだよね」
「と、言うと?」
「誰かと弾幕ごっこやって私が勝ったら帰らない、私じゃないほうが勝ったら帰るってのは?」

そう言うと零夢に向かって笑いかける。丁度零夢も退屈だったようで同じく笑う。

「へえ、面白そうじゃん。誰とやるの？」
「そこだよねぇ・・・」
「零夢様～空さ～ん、何処ですか～？」
「丁度いいのが居るじゃないか」
「そうだねえ」

そして二人で笑い合っていた。

---

霊烏路空
・使用装備一覧
Ｍ８２Ｃ１［八咫烏］
ＭＩＮＩＭＩ軽機関銃［八咫鏡］
棒
ＳＶ―９８［天津］

ＶＳ

博麗霊奈
・使用装備一覧
博麗陰陽玉
お払い
博麗陰陽札

・使用スペルカード

防護「暴徒鎮圧防弾盾」

只符「怒りの田植え」

伝統「Ｃ４特攻」

双」

・使用スペルカード

防霊「夢想封印・盾」

霊符「夢想封印」

複製「夢想封印・

---

「いきます！・霊符「夢想封印」！」

「甘いね！防護「暴徒鎮圧防弾盾」！」

ガガガガガン！

「今のを防ぎますか・・・」

「そんな事言ってる余裕があるならこれ使っても大丈夫だよね！只符「怒りの田植え」！」

「何ですかその名前！」

説明しよう！【只符「怒りの田植え」】とはクレイモアを無数に配置し地雷原を構築するスペルだ！

只〈足元がお留守だぜ、新兵

等のコメントが多く書き込まれるぞ！

「よ～し、地雷原構☆築！」

ガシャン!!

空はクレイモアを設置する。

「これを行くんですか!?」

「うん。あとＣ４も追加！」

「そんな～！ヤメローマダシニタクナーイ！」

「却下！と言うことでこれも追加！伝統「Ｃ４特攻」」

空がＣ４を起爆しクレイモアも誘爆、何万もの極小弾が霊奈に襲い掛かる。
何とか避ける霊奈だがＣ４に当たりそうになる。

「くっ・・・それなら!防霊「夢想封印・盾」!」

霊力で出来た盾とＣ４が設置されたバギーが衝突し、衝撃波が周りの草木を揺らす。
霊奈は盾を展開していた為影響を受けなかったが空は当然衝撃波を直接くらう。

「うぐぅ・・・・」

「今です!複製「夢想封印・双」!」

霊奈の能力によって複製された二つの夢想封印が空に迫る。

「あ、これ無理だわ」

空は避ける事を諦め、全弾命中する。

勝負は霊奈の勝利という結果で終わった。

---

「んじゃあなー」
「また来てくださいねー！」
「おう！いくぞ装軌ー」
「いつの間にか地底に行くことになってる件について」
「あ、そういえば零夢、霊奈」
「ん？（はい？）」
「二人に贈り物」

と言い空は二人に銃を渡す。
零夢にはステアーＡＵＧＡ３とＭ９３Ｒ、霊奈にはＵＭＰ―４５とＭ９２Ｆだった。
「あと各種アタッチメントもあるからねー」

「こんな貰ってもいいのか?」
「戦力は多い方が良いでしょ?」
「まあな。ありがとな」
「別にどうって事ないよ、じゃあまた今度」
「おう」

そして空達は地底へ
「やっぱ行くのめんどくさい」
・・・・・・行くと良いな

なうろーでぃんぐ・・・

# 東方核熱鳥―Ｔｈａ　Ｎｕｃｌｅａｒ　Ｃｒｏｗ―

## 第１２話　はじめてのせんそう

ー日本某所ー

日本の何処かの廃ビルで政府の官僚と日本陸軍の司令官が話をしている。

日本政府官僚「〝時空の歪み〟はどうだ？」

日本陸軍司令官「はい、〝歪み〟は依然活動しており恐らくそこに異世界への『ゲート』が存在するものと思われます」

官僚「そうか・・・全兵力をこの異世界に投入し制圧、資源を確保しろ」

司令官「良いのですか？例え法が改正されたとはいえ他国に侵略するなど・・・」

官僚「私だって侵略なんて本当はしたくない！だが日本は既に資源が尽きかけている！私達が生きて行くにはもうこれしかないんだ・・・」

司令官「酷いものですね、運命というのは」

今の会話でわかった人もいるだろう。日本は法律を改正し［自衛隊］を［日本軍］に変えている。そして日本軍の初任務は『異世界を侵略する事』だった。

ー空視点ー

読者の皆さんこんにちは霊鳥路空だよ～。

今すごい面倒な作業やってるよ。組み立てめんどい。

「ここを、こうして・・・これは・・・こっちか・・・うん、これで良し！」

「何やってんの姉さん？」

「ん～？核融合炉の建設と制御棒を改造してた」

「核融合炉は分かるけど制御棒の改造って何したの？」

「えーとね、まず制御棒にＧＡＵ－８を内蔵して・・・」

「へぇ・・・ってＧＡＵ－８!?なんつう物つけてんのさ！」

「しかも砲弾は劣化ウラン弾を自動生成するから弾切れの心配もなし！」

「外の世界で使ったら批判されるだろうけどね」

「別に外では撃たないし・・・・・多分（ボソッ」

「多分!?もしかしたら使っちゃうの!?」

まあ外から攻められない限り使わないと思うけどね。今はオリハルコンとかヒヒイロカネとかを合わせた合金で弾と銃本体作ってるし、まだ追加要素あるし。

『ドオオオエオン!ZUUUUUUUUUUUUN!ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・』

うぉあ!?、すごい音だ。しかも揺れてるし。

「地震!?」

装軌は地震だと思ってるみたいだけど多分この揺れはミサイルが着弾したもの、でもにとりとフランは使う訳がない。そうなると残りは・・・。

「装軌」

「どうしたの？とりあえず机の下に行ったほうが・・・」
「外の世界が攻めてきた」
「いい・・・はぁ!?」
「すぐ準備して」

まずはにとり達と合流しよう。
外の軍隊との戦闘・・・いや、状況で判断すると『戦争』かな？
今までの弾幕ごっことは違う、命を懸けた戦いになるだろう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

霊烏路空
・使用装備一覧
Ｍ８２Ｃ１［八咫烏］
ＭＩＮＩＭＩ軽機関銃［八咫鏡］

九十九装軌
・使用装備一覧
Ｌ１１５Ａ３
ＡＮ―９４

ＳＶ―９８［天津］
制御棒改
・使用スペルカード
崩壊「アフターマス」
乱射「数撃ちゃ当たる」
惨劇「繰り返される過ち」
撃符「スタースティンガー」
サイル」
銃符「ヘルズショットガン」
ル」
核熱「ニュークリアフレイム」
掃射「Ａ―１０サンダーボルト」
ウォートホッグ」
銃舞「ワンマンアーミー・ガンパフォーム」
ストラ」
銃符「面制圧射撃」

Ｐ９０
ファイブセブン
・使用スペルカード
加速「アクセルバレット」
速射「クイックショット」
一瞬「クイックバレット」
補食者「プレデター空対地ミ
暴風「ヘルストームミサイ
隠密「サイレントアサシン」
掃射「Ａ―１０ＳＢ３
銃奏「ガンパレード・オーケ
連射「ダブルタップ」

六連鋸「グラインドブレード」
シップ」
核弾頭「ヒュージキャノン」
D」
ＩＣＢＭ「ヒュージミサイル」
鉄柱「マスブレード」
全方位「マルチプルパルス」
規格外「オーバード・ウェポン」
???
核爆「ニュークリアストライク」
歌」
弐式「レールガンｍｋ．２」
・ラストスペル
「幻想のオーバーテクノロジー」

・ユニゾンスペル（合体技）

・空＋装軌

垂直離陸機「ＶＴＯＬウォー
自走爆弾「量産型ＲＣ―Ｘ
爆撃「Ｌストライク」
爆撃「ＭＯＡＢ」
衛星「クイックサテライト」
一斉掃射「死を振り撒く猫」
瞬速「予測可能回避不可能」
桜花「舞い散る魂への鎮魂

・ラストスペル
「超加速連撃」

変則「クロスバレット」
・空＋フラン
絶対禁忌「パンドラの箱」
・空＋にとり
超兵器「変態技術の集合体」
・四人全員
「グラウンドウォー」

なうろーでぃんぐ・・・

# 第１３話　反省も後悔もしていない

やあ皆、俺はうーろん茶。どこぞの小説投稿サイトで細々とオリジナル小説を書いたりしてるよ。

そして突然だが俺は今とても混乱している。

なぜなら・・・・・薄暗い銃火器の置かれた部屋の中で目が覚めたからだ。

「・・・・いやいや、意味わかんねぇよコレ」

何で俺がこんな目に合わないといけない・・・・ハッ！まさかサバゲで開幕特効したから？

・・・無いか。あれ二週間前の事だしな。

それにしても本当に此処は何の部屋なんだ？ハンドガンからショットガン、挙げ句の果てにはペイロードライフル（重装弾狙撃銃）まであるし武器庫だろうけど・・・。

〈ガチャ・・・〉

不意にドアが開き野戦服を着た少女（何故かぬこ耳と尻尾付き）が入って来た。

「さーて、準備するかー・・・・貴女、誰？」

え？あんたこそ誰だ？つーか今『貴女』って言わなかったか!?

「何で女の子がここに居るのさ？」

「いや待て俺は男だ！」

声も男のまま・・・

「じゃねえ！」

「うわ！どうしたのいきなり？」

「自分が女になっている事にとてつもない衝撃を受けてた」

「そ、そうなんだ。ところでどうしてこんな所にいるの？」

「いやそんなの俺が聞きてぇよ」

「だよねー」
「ていうか此処はどこなんだ？」
「ここ？ここは『幻想郷』忘れ去られた者達が行き着く最後の楽園だよ。いや〝だった〟かな」
「だった？何で過去形なんだ？」
「現在進行形で外の世界から侵攻されてるって姉さんが言ってたから」

外の世界からの侵攻？そんな話あるはず・・・いや、待てまさか。

「それ侵攻してんの多分日本軍だわ」
「日本軍？自衛隊じゃなくて？」
「何であんたが自衛隊の事を知ってるかは後回しにするとして・・・あんたの言う通り１か月までは自衛隊だった、だけど度重なる法改正で自衛だけじゃなく他国への侵攻も可能になったんだよ・・・それに数日前に『異世界へのゲート』を発見したって報道されてたからな。まあ信じる奴なんて殆ど居なかったけど」
「ふぅん・・・あ、そういえば名前を言ってなかったね。私は九十九装軌、君は？」
「変わったなｍ〈ガシャッ〉・・・何も銃を突きつける事はないだろ、まあ良いけどさ。俺

は・・・」

俺は・・・

・・・・・・・・・・・・

―俺の名前って、なんだっけ?―

ヤバイ、マジでヤバイ。重要な事を忘れていた。それもかなり重要な事を。

名前が、思い出せない。

・・・いやいやねぇよ。自分の名前を忘れるとか。いやこれどうしよう。

「どうしたの?」

「名前が、思い出せない・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・姉さ~ん、ちょっと話しがあるからきて!」

▪わかった▪

「・・・まあ名前は何とかなるでしょ、ところで何か背負ってるみたいだけど？」

は？背負ってる？と思い自分の背中を触ってみる。固く冷たい感触が伝わってきた。

「は？なにこれ？」

〈ガシャン〉

背負っていた物を前に下ろしてみる。

それは形状はとても見慣れていて、実際には見慣れる筈のない物、銃だった。まず見た感想は『大きい』自分の身長は高めの筈だというのに斜めに背負わないと地面に当たってしまうほどだった。

「でかいな、これ・・・」

「まあ君の背じゃ仕方ないでしょ、姉さんといい勝負だよ？」

「・・・・は？」

今装軌は『その銃の大きさなら仕方ない』とかじゃなく『君の背なら仕方ない』と言った。

となるとそこから考え出せる結果は一つ。

「・・・なぁ装軌、俺の背って何ｃｍある？」

「身長？多分１５０～１５５ｃｍ位かな？」

自分の身長が低くなっているという事だ。

まあ思うところはあるが、ぶっちゃけ『背は低いほうが良い』という俺の昔からの願望が違う形とはいえ叶ったのだから良しとしよう。

等と考えていると装軌が入ってきたドアからこれでもかッ！というほど銃や兵器を背負った少女が入ってきた。

「装軌ー。来たよー」

「ああ姉さん、こっちこっち」

「おぉいたいた・・・って装軌、この子誰？まさかとは思うけど「誘拐とかじゃないよ」あ、そうなの？良かった～」

「んでこの子名前を思い出せないみたいでね、なんか無いかなって」
「ほうほうなるほど。つまりこの子に合う名前を決めればいいんだね？」
「うん」
「そうと決まれば考えるか！あ、そういや君って種族ある？無かったらおかしいけど」
「種族？人間じゃないのか？」

逆に妖怪とかいたらこえーぞ。

「あー、うん・・・・こういう時の神頼み！」

そういって重装備少女（仮）はおもむろにＦＰＳゲームで使うようなＰＤＡを取り出し、どこかに連絡し始めた。

《おう空か、どうしたんじゃ？》
「えーと、人に名前を付けるとしたらどんな名前にする？」
《名前か？ふむ、そうじゃな・・・『叢雲琥珀』なんかどうじゃ？》
「だってさ、この名前でいい？」

どうやら名前を考えてもらえたようだ。叢雲琥珀・・・気に入った！

「その顔を見る限りその名前で良いんだね？」
「おう！所で結局俺の種族って何なんだ？」
「あぁ、忘れてた！ねえねえ神様、この子もとい琥珀の種族ってわかる？」
《おう、ちとまっとれ・・・ふむ、どうやら琥珀の種族は九十九神、それもお主の作っていた銃の九十九神の様じゃ》
「九十九神になるほど前に作ってないんだけどなぁ・・・」
《ま真実を受け入れろって事じゃな。わしは失礼させてもらうとするかの》
「う～ん、まあいいや。んで琥珀、君の依り代になってる銃がどれかわかる？」
「ん、ちょっと待ってて・・・これ、だな」

依り代だから何となくで分かったしそれはいいんだよ、てか最初に背負ってた奴だったし。

でもさ、この武器かなり鬼畜だな。何だよ『可変式全距離対応汎用火器：ＸＭ２７５Ａ２』って。（九十九神である琥珀は自分の依り代を認識した時点でＸＭ２７５Ａ２の

知識が全て頭に入っています）

「なあ装軌」
「なに琥珀？」
「これかなり鬼畜だな」
「みたいだね、ところで一緒に幻想郷を日本軍から守ってくれないかな？」
「おｋ」
「流石に即答するとは思わなかったよ（、・ω・、；）」
「だってここ幻想郷とかいう場所ならここで九十九神として生まれた俺はもう日本国民じゃないからな（＊、ω、）あとこの顔文字を流行らせたい」
「恩に着るけどその顔文字は流行らないし流行らせない。んじゃ行こうか姉さん」
「うっしゃー！いくぜー！」

と言って重装（以下略）は出ていく。ぁ、そういや名前聞き忘れてた。

「私は霊烏路空だよ！」
「俺口に出してた？」

「姉さんは地の文を読めるからね」

「メタ発言ェ・・・」

～地の文視点～

やっぱり最後まで締まらない空達・・・あの空さん?あなたの手に収まってる毒々しい紫色の液体は何ですか?

「ん～?あぁこレのこと?ハイポーションだヨ、危ナくなイよ、ホントウダヨ」(真顔)

ひぃっ!すいませんそれだけはどうかお許しくだｓガボ!?ゴクッゴクッ・・・イ‥エ‥ア‥ァァァ!!ティウンティウンティウン・・・・

Ｎｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ‥‥

# 第１４話　なんか色々ごめんなさいｂｙうーろん茶

ー地霊殿ハンガーー
ー視点：琥珀ー

「準備はできたよ姉さん」
「こっちもあと少しで終わるよ・・・よし！できた！」
「・・・うわぁ」

特に準備も無かったから装軌についてきたんだが空がＭｉ―２８ハボックを作ってやがった。いや別にそれだけなら良いんだけどな・・・。
改造がキチガイじみてるんだよ。
一つ目に武装、従来機首の下に搭載されている３０ｍｍ機関砲が機体側面に二門搭載、機関砲があった所には四砲身の小型ガトリング砲がくっついていた。話を聞いた所機関砲は有人、遠隔操作どちらでも使えるらしい。操縦手が使う事も可能らしい。（ガトリングは７．６２ｍｍＮＡＴＯ弾らしいがそもそも此処にＮＡＴＯ（北大西洋条約機構）なんて無いだろ

う）

そしてパイロン（機体側面の推進翼みたいなアレ）には大型のフレア及びチャフの散布装置とＥＣＭジャマーなんかの妨害装置からロケットポット、果てには燃料気化爆弾まで積まれている。

そんなキチガイ武装の中一際目を引くのが『１２０ｍｍ滑腔砲』だ。通常なら戦車に搭載されている主砲なんだが・・・慣れるしかないようだ。

そして何を思ったか機体後部側面に可動式の２連ブースターが２つずつ付いている。簡単に纏めると原型留めてないと言えばいいだろうか。

「これ最早別機体だよな」

「そうだね、それじゃあ名前Ｍｉ３０にしちゃえばよくね？」

「いいんじゃねえの別に、それじゃあ行くか。操縦任せて良いか？」

「良いよ、乗って」

空がコクピットを開けていたので二番席にジャンプで飛び乗る。

「エンジン始動っと」

一度『カシュッ』という音が聞こえた後にヘリのプロペラが回りはじめ一瞬の浮遊感、Ｍｉ―３０が離陸したのだ。

『琥珀、気持ち悪くない？』
「大丈夫だ、問題ない」
「その発言は・・・おっと、地上に出るよ」
「了解」
『サポートなら任せて』
「じゃあ任せる・・・ん？あれは・・・」

地上から５本以上の帯が伸び、警告が鳴り響く。

「ＳＡＭ!!フレア放出!!」
『姉さん大丈夫!?』
「なんとか撒いた！」

そう言っている内に二度目の警告音。

「またかよ!どっから撃ってんだ!?」

『あそこ!あの木の影に十人いる!』

十人!?となると俺の出番か。

５．５６ｍｍガトリング及び３０ｍｍ機関砲との接続良好、タイムラグは無し。

弾数はガトリングが１５０発で機関砲が３０発の２門リロードはどちらも１５秒掛かるから・・・・いける。

「空、出来るだけ低空を飛んでくれ」

「わかった。行くよ」

機体が高度を下げる間にガトリングの銃身を回転させいつでも撃てるようにしておく。

そして地対空ミサイルを担いだ兵士が視界に入った瞬間限界まで砲身を外側に向けていた機関砲を射撃しながら内側に凪ぎ払う様に向きを変え６人を吹き飛ばす。

あと４人と思った矢先この話で３回目の警告音が鳴るが空はフレアを放出した後、機体を無理矢理ロールさせ側面のブースターを点火しミサイルを撒くという荒業をやってのけた。体にかかるＧが凄い事になってる・・・・・・よし、慣れた。

「なんだよ・・・こいつ・・・」

「逃げるんだぁ・・・勝てる訳ないよ・・・」

「逃　が　さ　な　い☆」

『ブウウウゥゥゥウウン!!』

『『『ギャーーーーーー!!』』』

「ヒャッハー!死に晒せー!」ズガガガガガガン!!

・・・よし、殲滅完了。戦争とはいえ人を殺したのだが種族が違うからなのか罪悪感を全く感じない。

感覚は人間のままだと思っていたが、意外と変わるものだな・・・。

「それじゃあ人里に向かうから着いたら一人で操縦して」
「ああ、わかった」

ー人里：空視点ー

私達が人里に到着してすぐにとりとフランが駆け寄ってきた。

「戦況は？」
「抵抗はしてるけど押されぎみだね」

とフラン。
相手が完全武装の日本軍なのに少し押される程度なのは人里と博麗神社を要塞化し

たからだと思う。

「とはいえ、このまま押されるのはヤバイからそろそろ反撃に出よう」
「そうだね。ついでにストレス発散する～」
「・・・何があったし」
「カリスマブレイク（以下ＫＢ）したお姉様の子守」
「・・・・・あっ（察し）」

確かにレミリアはＫＢすると幼稚園児並の我が儘を言い出すからなぁ・・・・・姉よりも妹の方がいろんな意味でしっかりしてるってどういうことなの？

「・・・頑張ったね（ポンッ）」
「やめて・・・只でさえ精神的ダメージが蓄積してて泣きそうなんだから」
「おいあんたら！話してないで撃てよ！」

意外と防衛してる人達が凄かった。
とはいえ作戦を考えないとなー。

「にとり、フラン。私は敵陣に特攻仕掛けてこようと思うんだけど」
「私も行く」
「じゃあ私も行ってやろうではないか。この前念願の超大型戦車が完成したんだ、２５メートルプールよりも大きくなったよ！」
「お、おう。で？何処に置いてあんの？」
「近くの森に光学迷彩起動させてそこに隠してる」
「じゃあにとりはその戦車を取ってきて、私たちは支援するから」

丁度この前スペル大量に追加したし大丈夫でしょ。

「了解。出来るだけ速く行くけど１０分はかかる」
「わかった。装軌！」
『はいはいどうしたの？』
「琥珀と交代して降りてきて」
『わかった』

上空を飛び回っていたＦ―３５が私達のいる広場に設置されたヘリポートに降り立った。ホントＶＴＯＬって便利だね～。

さってと先ずはアームズノート（いつもＡＮと呼んでる、後ろに９４は付かない）を待機形態で展開。

「あ、ＡＮ使うの？私も使おう」

と言いつつフランもＡＮを展開した。

フランが展開したＡＮはＢＭ―２１（グラート）という自走ロケット砲だ。両腕と背中の砲身からは合計で８０発ものロケット弾が連続で射出される。（背中が４０発で片腕に２０発だ）

とはいえ私だって負けはしないさ。

「ＡＣ『ライムライト』展開」

だってアーマードコアだもの。人間サイズだけどね。パーツは全てＡＣＶの物を使っている。ＡＣｆａ以前のパーツは武器しか使えなかった。多分コジマのせいだね。

「次に『ヒュージミサイル』を展開」

『オーバードウェポン』ＡＣＶの武器でＡＣの規格を度外視して設計された超兵器という設定の超変態兵器だ。

原作では起動して一定時間経つと自動で止まる等のデメリットが設定されていたが私のはその様なデメリットを全て無くしている。

なんかちょっとパラメータ弄ったらできた。

というか何故ヒュージミサイルを出したかというと敵の固まっている所にぶっ放す為だ。

だけどミサイルだから誘導装置が必要になる。

「ってことでツヴァイ、敵が一番密集してる所の座標わかる？」

『ちょっと待って下さいね・・・・・上空のＵＡＶの映像から座標を特定、マップに表示します』

「よし、ありがとう・・・森の近くだね。まぁいいや」

「いい・・・のか？」
『戦車に当たらなければ無問題ですよ』
「え、でも・・・」

こまけえこたぁいいんだよ。
とりあえず座標を誘導装置に登録してミサイルを組み立てる。そして最終安全装置を解除して・・・ファイア！
ミサイルが飛んで行ったのを確認した後ＡＣを解除、何時もの装備を担いで里の壁を飛び越えＭ８２を３バーストモードに変え７回トリガーを引く。
『ガガガウゥゥン!!』
「ギャァァァーーー」

当たった数は１６。いつもは連射しないので命中精度は低い。
そしてＭＩＮＩＭＩを出し銃身が焼け付くまで発射、戦線を押し上げていく。

「このまま突っ込む！」

と、その時丘の方が一瞬光った。
次の瞬間体にとてつもない衝撃が走る！
・・・うん、すっごい痛い。もうなんてゆうか転げ回りそうな位痛い。生身の人間がグングニル食らった感じ。

『空！１０式戦車を確認！何処か遮蔽物に身を隠すんだ！』
「言うのが・・・遅い・・・」
『まさかアイツもう撃ったのか!?』
「多分・・・・・どうにかして・・・アイツ壊せない？」
『無理だ！対空兵器が多くて近づけない！』

まさか序盤から戦車を出すなんて・・・あっちは本気で来てるね。
しかも今の一撃で内臓にかなりのダメージが与えられた。多分肋骨は何本か逝ったと思う。
ある程度は回復するだろうけどこんなところで倒れていたら第２射が来るしその時

に私は防御ができない。
遮蔽物まで逃げられるか・・・。
「ぐっ・・・・ハァ・・・ハァ・・・」
何とか立ち上がり、遅くではあるが後退していく。が、それを日本軍は黙って見ている訳にも行かないようで８９式小銃や６４式７．６２ｍｍ小銃を構えながら距離を詰めてくる。見逃してくれたら楽だったんだけどなぁ・・・。
「来るなッ・・・掃射「Ａ―１０サンダーボルト」！」
ダメもとでスペルカードを発動した。まあ足止め程度にしかならないだろうけど・・・。虚空から出現したＡ―１０がガトリング・・・ＧＡＵ―８を地面にばらまき土煙があがる。
今のうちに後退しないと・・・遮蔽物まではまだ距離があるから今下がらないと逃げられない。

「あと、すこし・・・」

後ろを少しだけ振り返っても依然土煙の立ったまま。
このまま歩き続ければ補足される前に逃げ切れる・・・・・筈だった。
背中にさっきと同じ強い衝撃、しかも三回。

「ツ!アアアアアアアアアア!!」

身体中を激痛が蝕み、３発の１２０ｍｍ形成炸裂弾の着弾で吹き飛んだ左肩からは血が溢れる。
体から体温が奪われていき、意識が遠のく。
いつの間にか目の前に来ていた兵士が何を言っているかも解らない。
死ぬのかな・・・・・私。
でも、只では死ねない。

「ぁ・・・六連・・・・鋸・・・グラインド・・・・・ブレード・・・!」

スペルを唱えとっくに限界を迎えている体を起こす。
そして砲弾に撃たれまくった背中にマウントされた巨大なチェーンソー「クラインドブレード」を構える。

『マスター！それは危険です！体も限界なのにそんな物使ったら最悪死にますよ!?』
「・・・有難う。ツヴァイ、貴女は装軌の所に逃げて」
『嫌です！私も一緒に！』
「ツヴァイ、これは命令。逆らうことは許さないよ」
『ッ！・・・必ず、生きて帰って来てくださー』

ツヴァイの声が聴こえなくなる。
グラインドブレードの左側、エネルギー供給アームが左肩の辛うじて残った部分を切断し接続する。痛覚も麻痺したのか痛みをかんじない。
そして右手にもったチェーンソーの刃を回し、前に突き出す。
目の前にいる兵士が肉塊と化し返り血で紅く染まる。
そしてその場で一回転し２人殺す。

「ーーーーーー!?ーーーー!」
「ーーーーー、ーーーーーー!」

もう歌すら聴こえない。てか何も聴こえない。
てか別な兵士に気付かれたね、だったらせめて１０式だけでも！
体に当たる弾丸は気にならないしどうせ弾くから無視、１０式の砲身だけに意識を集中させる。
砲身から形成炸裂弾が発射されるが・・・遅い。グラインドブレードを振り抜き切断する。
そしてありったけの精神力を振り絞り１０式の砲塔の上に張り付き突き刺す。１０式が爆発し全身から力が抜ける。
意識が無くなる瞬間見えたのは１０式とは比べ物にならないほど巨大な戦車が森から顔を出すところだった。